

実習の事前・事後指導の充実のための試み

— 保育研究会の学生と共に求め続けたもの —

豊 永 家壽子

Some Attempts to Improve Guidances before and after Teaching Practice : What
Childcare Research Circle students and I have been seeking

Yasuko TOYONAGA

I はじめに

保育者志望の学生が、わずか2年間の修業年限の中で学習しなければならないことは多様である。カリキュラムにおいて単位化されている一般教養から専門的な知識・技術まで、幅広く学ぶことが義務づけられている。特に、保育士資格（平成15年11月29日、国家資格化）や幼稚園教諭免許を取得するために欠かせない実習は、学生にとって楽しみでもあり、忍耐と努力を必要とするものでもある。

実習が楽しいのは、幼い子どもたちとの触れ合いを通して「子どもがかわいい」との実感がわき、「こうしてみよう」「あんな遊びをしてみたい」と思うことを、きょうもあしたも子どもたちと一緒に実現できるからである。また、忍耐と努力を必要とするのは、乳幼児が集団生活をしている現実の場において、通り一遍の知識や理屈が通用しないことが多い中で、自己変容を迫られるという厳しい面があるからである。

そして、そういう「生活」に真正面から立ち向かうからこそ、学生は実習によって大きく成長するのである。

そのような「実習」はいかにあるべきか私なりに探究し続けてきて、今なお結論は出ていないが、本学初等教育科の「保育研究会」の学生と共に生きた教材づくりに取り組み、年次ごと

にまとめてきたものをここで整理して、今後の授業でさらなる活用を図りたい。

以下II～Vは、別府大学短期大学部初等教育科児童学会発行の「初等教育」第25号・第29号・第30号に、保育研究会の活動報告として掲載したものを基にした。

II 実習への期待と不安

子どもが好きで、早く子どもと一緒に遊びたいと思ってはいても、実習に対する不安はいつも心の中にある。あまり気負わずに行けるはずの自主実習でさえ、行く前はハラハラ、ドキドキする。ところが子どもの中に入ると、もう夢中で子どもと遊んでしまい、一緒に汗をかいたりして、「とても楽しかった」「また行きたい」と思うようになってくる。

今、いよいよ本実習が始まるということで、期待と不安が入りまじった複雑な気持で過ごしている。自分の思い込みだけで不安になりすぎてもいけないと考えて、現在心の中にある各自の思いを具体的に出しあってみることにした。

それをまとめたのが表1である。

III 乳幼児の発達理解

3歳未満児の身体的・精神的発達が目覚ましいということは授業の中で学んではいたが、実

表1 実習への期待と不安

	期 待	不 安
子どもとの関わり・援助	① 子ども達とじかに触れることができるので楽しみ。 ② 赤ちゃん, 子どもに会えるのでわくわくする。 ③ 優しく, 子どもの気持ちになって笑顔で話したい。 ④ 多くの子どもに長い期間触れ合える。 ⑤ 今まで半年間子どもについて勉強してきたことがどれだけ通用し, どれだけ自分が理解できるのか楽しみ。 ⑥ 赤ちゃんと関われる。 ⑦ 子どもをだっこして絵本を読んであげたり食べさせてあげたりしたい。 ⑧ 乳児に本を読んであげたい。 ⑨ 指遊びをして, みんなが集まったところで導入をしながら紙しばいをしたい。 ⑩ タンバリンを持って歌いながら踊りたい。 ⑪ みんなで何かを作って遊びたい。 ⑫ 外でできる遊びをしたい。 ⑬ 探検ごっこをして, いろんな所を遊びながら調べたい。	① 子ども達が自分になついてくれるかどうか。 ② 子ども達が自分に親しみを持ってくれるかどうか。 ③ 子ども達に積極的に関わられるかどうか。 ④ うまく, より適切な対応ができるか。 ⑤ 子ども達の名前がなかなか覚えられない。 ⑥ 1~2歳の子どもは, 何と言っているか分からなくて, どうしてほしいのかが分からない。 ⑦ 子どもを見守るべき時と, 注意する時の見分け方がむずかしい。 ⑧ 気づかないといけない事に気づけるのか不安。 ⑨ 子どもをどう叱っていいのかが分からないし, そんな勇気がない。 ⑩ 絵本を読む時, 子どもはちゃんと聞いてくれるか。 ⑪ ピアノを子ども達の前で間違いそうでこわい。 ⑫ 子どもは, いつ何をするか分からないので, もし事故などが起きた場合, 対処しきれないし, 責任もとれないのでこわい。
専門的知識・技術	⑭ 自分が今まで習ってきたことが, 実際自分の目で見て確かめられる。 ⑮ 自分が何を学び取ってくるか楽しみ。 ⑯ 勉強で習っただけとはちょっと違う, 現場での保育の仕方はどうなのか, 子どもの毎日の生活はどんなものかを知るのが楽しみ。 ⑰ 紙芝居と指遊びを色々マスターしていきたい。 ⑱ 自分の保育観を持てるようになりたい。	⑬ 実習へ行ったら「分からないことは何でも聞かないとダメよ」と言われるが, 分からないところが分からない。 ⑭ 日誌の書き方が分からない。 ⑮ 急にピアノを弾いてと言われても弾けないし, 絵も書けない。 ⑯ ピアノも下手だし, 手遊びもあまり知らないで自信がない。 ⑰ 設定保育など私にできるのだろうか。

際に実習を経験してみて, 2か月という短い期間で目で見てはっきりと分かるほどの変化が多く見られ, おどろいた。

5か月, 6か月の赤ちゃんでさえ, 表情が豊かになり, 笑顔や喃語, 手足の動きなどで自分の感情を表現するようになっていた。

これは, この月齢になれば必ずここまで発達するとは限らず, 周囲の環境, 特に親や保育者のかかわり方によって発達のし方は異なり, 個人差が出てくる。

そこで, 3歳未満児の具体的な姿(同じ子ども2か月後の姿)を実習日誌の中から取り出

して, 比較的是っきりと変化がとらえられる運動機能・生活習慣・言葉について整理したものを表2に示す。

IV 学生自身が考えた実習の心得

実習中は緊張の連続で, 体力的に疲れてしまうことも多かった。しかし, 終わってみると自分なりにやりとげた充実感を味わうことができた。

その実習をふりかえって, 先生から言われた実習の心得ではなく, 自分が考えた実習の心得

表2 3歳未満児の変化

	年齢	6月の実習	8月の実習
運動機能	0歳	① ハイハイをしていた。	○ つかまり立ちになっていた。
	1歳	② 音楽に合わせて、座って手をしきりに動かしていた。	○ つかまり立ちをして、足をしきりに動かしていた。
	2歳	③ 少し歩くが、ほとんどハイハイをしていた。	○ 歩くようになり、少しずつ階段も登れるようになっていた。
	3歳	④ タイヤの上を歩く時、保育者が援助してもうまくバランスがとれず、すぐ落ちていた。	○ 保育者が援助すると、上手にバランスがとれていた。
生活習慣	0歳	⑤ ブランコに乗って、自分ではこぐことが出来ず、保育者に押ししてもらっていた。	○ 自分の力で立ってこいだり、座ってこいだり飛び降りたりしていた。
	1歳	⑥ おやつの時、プリンのふたをうまく開けることが出来なかった。	○ ゆっくりだけど、ふたを開けることが出来るようになっていた。
	1歳	⑦ プリンの型等に砂を入れて、上手に型を作ることが出来なかった。	○ 上手に型を作れるようになっていた。
	0歳	⑧ ミルクを飲んでいた。	○ 離乳食を食べ始めていた。
	1歳	⑨ 給食前、ひざの上に手を置いて待つことが出来なかった。	○ ひざの上に手を置いて待てるようになっていた。
	1歳	⑩ 給食やおやつの時、手を合わせて「いただきます。」が出来なかった。	○ 上手に手を合わせて「いただきます。」をしていた。
	1歳	⑪ オムツを使っていた。	○ トレーニングパンツになっていた。
	1歳	⑫ 普段はトレーニングパンツを使っているが昼寝の時はオムツをしていた。	○ 完全にトレーニングパンツになっていた。
	1歳	⑬ 排泄の時、保育者がズボンやパンツ等を脱がしていた。	○ 自分で脱いで排泄するようになっていた。
	2歳	⑭ 給食やおやつの時、保育者が用意した椅子に座っていた。	○ 自分で椅子を机の所に運んで座るようになっていた。
	2歳	⑮ 手やスプーンを使って給食を食べていた。	○ 上手に箸を使って給食を食べていた。
	2歳	⑯ 決まった時間に保育者が声をかけ、排泄に行っていた。	○ 自分で排泄を知らせトイレへ行くようになっていた。
	2歳	⑰ トレーニングパンツを使っていた。	○ パンツになっていた。
	2歳	⑱ パンツやズボンの着脱に保育者の援助が必要だった。	○ 自分でパンツやズボンを着脱出来るようになっていた。
	2歳	⑲ 降園時、保育者が荷物をテラスに持っていった。	○ 自分で荷物を持っていくようになっていた。
	3歳	⑳ 食後手や口を保育者に拭いてもらっていた。	○ 自分で拭けるようになっていた。
	3歳	㉑ うまく箸を使うことが出来なかった。	○ 箸で上手に食べていた。
	3歳	㉒ 着脱の時、保育者からの援助が必要だった。	○ 時間がかかっても自分で着脱しようとしていた。
	3歳	㉓ 自分でボタンをとめることが出来なかった。	○ 自分でボタンをとめることが出来るようになっていた。
	3歳	㉔ 自分の脱いだパジャマをうまくたたむことが出来なかった。	○ パジャマを上手に袖を合わせてたたむようになっていた。
言葉	0歳	㉕ 喃語を発していた。(9ヶ月)	○ 喃語を発していた。(11ヶ月)
	1歳	㉖ 言葉にはなっていないけど、絵や絵本を見ながら何かを言っていた。(聞きとりにくい。)	○ 「リンゴ」「ワンワン」等は、はっきり言えるようになっていた。(語彙数が増えていた。)
	2歳	㉗ 「おはようまんまーす。」と挨拶していた。	○ 「おはようございます。」とはっきり挨拶をしていた。
	3歳	㉘ 言っている言葉がはっきりせず、うまく聞き取ることが出来なかった。	○ 一つ一つの言葉がはっきりしていてよく話すようになっていた。

を5項目ずつ書いてみた。実習中、そして前後も含み、保育の専門家になるための実習に対する心がまえや努力目標として大事だと思ふことは、無限に出てきた。あえて5つに絞り込むとしたら、その中でも何が大事かについてじっくりと考えなければならなかった。

子どもたちのことや自分自身の体験を思い出

しながら、反省と今後への課題という気持ちをこめて書いたものを整理・分類し、後輩の実習に生かしてもらいたいと思う。

実習の心得として実にたくさん挙げられたものの中から、実習生のマナー・ルールに関するものを表3、保育者の専門性に関するものを表4のようにまとめた。

表3 実習生としてのマナー・ルール

心身の健康管理	<ul style="list-style-type: none"> ① 実習前からの健康管理をきちんと行う。 ② 食事、睡眠を十分にとり、身心の疲れを次の日に持ちこさない。 ③ 暴飲・暴食をせずに、規則正しい生活を心がける。 ④ 実習中は子どもと十分に関われるように備え、バイトは実習に支障が出るのでやらないようにする。 ⑤ 体力を保ち、子どもたちと本気で元気一杯に遊ぶ。 ⑥ 身軽に行動する。
実習態度	<ul style="list-style-type: none"> ① 行動をすばやくし、迷惑をかけない。 ② 自分から意欲的に何でも行い、責任を持つようにする。 ③ 毎日「今日は～を試してみるぞ」などという目標を持って実習に行く。 ④ 子どもたちと仲良くし、早く園になじむ。 ⑤ 先生がされる前に、自分でも出来ることは自ら進んで見つけて行う。 ⑥ 自分は実習生だという心構えを忘れずに、常に学ぶという姿勢を持ち続ける。 ⑦ 毎日必ず反省をし、同じ失敗を繰り返さない。 ⑧ 自分自身が実習に来て良かったと思える実習にする。 ⑨ まわりの人との触れ合いを大切にし、気配りを忘れない。 ⑩ 先生からの注意やアドバイスは素直にきき、そのことについては十分に努力する。 ⑪ 積極的に掃除や作業をする。 ⑫ 一日の流れを頭に入れ、てきぱきと自発的に動く。 ⑬ 気づいた事や感動した事は、忘れないようにメモする。 ⑭ 自分のありのままにしているようにする。 ⑮ 実習させて頂く園への感謝の気持ちを忘れない。 ⑯ 礼儀正しくする。
自己表現	<ul style="list-style-type: none"> ① あいさつは、大きな声ではっきりとする。 ② 子どもと同じ目線で名前を呼びながらあいさつをする。 ③ 先生、子ども、親などに正しい言葉使いをする。 ④ 言葉はゆっくり、はっきり、正確に話す。 ⑤ 先生方には丁寧語を使う。 ⑥ 「〇〇ちゃんおはよう。～して遊ぼうね。」など声かけをして仲良くなる。 ⑦ 子ども達一人一人に声をかけ、コミュニケーションをとる。 ⑧ 明るく、優しい笑顔を忘れないようにする。 ⑨ 子ども達と仲良くなるために、いつも明るい笑顔を心がける。
時間提出物	<ul style="list-style-type: none"> ① 提出物は期限までに必ず出す。 ② 日誌は毎日書き、その日の反省をする。 ③ その日の出来事は細かく記録し、次の日に生かす。 ④ 遅刻、欠勤をしない。

表4 保育者の専門性

保育準備	<ul style="list-style-type: none"> ① 絵本・紙芝居・指遊びなどを身につけておき、実践する。 ② 絵本や紙芝居を読む練習を前もってしておく。 ③ 子どもの行動をよく観察しておく。 ④ 遊びの材料は、十分に自分で確認し、使い慣れ遊び慣れた上で子どもに紹介する。 ⑤ 設定保育の準備は早めにする。 ⑥ 子どもがケガをした時の薬の使い方などの予備知識をつける。 ⑦ 実際に玩具や遊具に触れて一緒に遊ぶ。
子どもへの接し方	<ul style="list-style-type: none"> ① 子ども達と一緒に、元気よく思いきり遊ぶ。 ② 子どもと本気で遊んで仲良くなる。 ③ 子どもと遊ぶとき、力を抜かないで真剣に遊ぶ。 ④ 一緒に遊んで子どもから楽しいと思われるようにする。 ⑤ 園の先生以上に子ども達と遊ぶ。 ⑥ 年齢に合った指遊びをする。 ⑦ 子どもと思いきり遊び、子どもの気持ちや発達を理解する。 ⑧ 積極的に子ども達と接する。 ⑨ 子どもと関わる時、体全体で表現できるようにする。 ⑩ 声かけ一つ一つに思いをこめ、その場に適した対応を心がける。 ⑪ 子どもが新しい発見ができるような接し方をする。 ⑫ 1日1回ずつは子ども一人一人とスキンシップをとる。 ⑬ 子どもと接しながら、そこから何を学びとろうかと意識することを心がける。 ⑭ 子どもの名前を早く覚え、子どもとのつながりをつくる。 ⑮ 子どもとの約束は必ず守るようにする。 ⑯ たとなついてこない子どもでも積極的に関わる。 ⑰ ひとりで遊んでいる子や元気のない子には、優しく声かけする。 ⑱ 「あそぼ。あそぼ。」と来る子どもに、「あとでね。」とばかり言わないで、他の言い方をするよう心がける。 ⑲ いつもニコニコしていても、注意する時にはけじめをつけるようにする。 ⑳ 優しく接するだけでなく、悪いことをしたときにはきちんと叱る。 ㉑ 誤っていることは、子どもにきちんと伝えて聞かせる。 ㉒ 子どもに間違った事を教えないようにする。
援助の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ① 子どもの話を聞く時、子どもと話す時は、ゆつくりと話す。 ② 子どもの話を最後まで聞く。 ③ 子どものどんな問いかけにも応答する。 ④ 子どもの気持ちをくみとるよう努める。 ⑤ 子どもの長所を見つけ、認めたりほめたりする。 ⑥ 子どもの発達に合った関わり方をする。 ⑦ 子どもが自分でできる事は自分でやらせ、過度な援助はしない。 ⑧ 常に子どもの立場になって考える。 ⑨ 子どもの視点で物事を考えるように心がける。 ⑩ 子どもの小さな発見や驚きを大切にす。 ⑪ 子どもの話に答え、気持ちを共感する。 ⑫ 子どもの目線と同じ高さで話し、共感したり温かく受け入れるようにする。 ⑬ 子ども一人一人にきちんと目と心を配る。 ⑭ 子どもを理解し、知ろうとする追究心をもつ。 ⑮ 一人一人の違いを理解するように努力する。 ⑯ 個性を大事にして、その子その子に合った対応をする。 ⑰ 子どもとの遊びに積極的に関わって、子どもの発達の様子や、興味・関心のあることを理解する。 ⑱ 子どもと接する中で、新しい何かが生れるような活動を取り込むよう努める。 ⑲ 言葉かけによって子どもの興味・関心を育てるようにする。 ⑳ 先生の行動を見て、良いと思う所は真似をしたりして自分の中に取り入れる。 ㉑ 先生方の子どもへの関わり方を見て勉強する。 ㉒ 子ども一人一人の記録をとり、成長の変化や発達の特性に気づく。 ㉓ 先生に教えていただいた絵本の読み方などを実際にやってみる。 ㉔ おむつ交換・ミルクの作り方・抱き方など、保育者としての基本的な技術をできる限り習得できるように努力する。 ㉕ 他のクラスや、異年齢の子どもの観察もする。 ㉖ 先生方や子どもたちから人間観などを学ぶ。 ㉗ 子どもの内面までよく観察して、実習中の学習課題として研究できるようにする。 ㉘ 子どもは教科書、テキストのマニュアル通りではないことを身をもって知り、生活を共にする中で、子どもの特性や心情を理解していけるよう努める。 ㉙ 自己目標が達成でき、自分のものになったのかを確認し、意味ある実習にする。

V 「実習指導」の授業で学んでおくこと

保育所や幼稚園に何度も実習に行き、実際に子どもに関わる経験をして、充実感や自分なりにやりとげたという満足感を得ることができた。しかし、子どもたちと接したり、設定保育

(指導案を書いて部分実習あるいは一日実習をすること)を経験することによって、あらためて自分の保育技術の未熟さを感じたり、専門科目の勉強不足だと思ふ場面が多くあり、反省させられた。

ただ反省しただけに終わらせないために、実習前にもっと勉強しておけばよかったと思うこ

表5 「実習指導」の事前学習

	内 容	アドバイス・コメント
(A) 自分で調べたり、事前の勉強をすべきこと(授業を含む)	<ol style="list-style-type: none"> ① 実習に行けば何とかかなと思っていた。 ② 実習する園に関する概要や特色、実習内容などを理解しておく。 ③ 子どもとの接し方やけんかの仲裁等を勉強しておけば良かった。 ④ 日誌の書き方(形式ではなく言葉の選び方)について、習ったことを行く前にもう一度見ておけば良かった。 ⑤ 漢字の間違いがたくさんあったので、もっと勉強しておけば良かった。 ⑥ 一つの遊びから何通りかの遊びへと展開できるように、工夫しておけば良かった。 ⑦ 沢山の遊びや製作(季節や時期に応じた遊び等)を勉強しておけば良かった。 ⑧ 指導案の立て方(導入、どんな流れにするか、どんな風に子どもたちに伝えていくか)をもっと勉強しておけば良かった。 ⑨ 予想通りに子どもたちが動かなかった時にどう子どもたちと関わっていくか等の対処法をもっと勉強しておけば良かった。 ⑩ 設定保育に対する気持ちの入れ方、準備等が悪かった。 ⑪ 指導案を実行してみたが、子どもの反応があまりなく、どうしてよいか分からなかったので年齢ごとの発達段階をよく理解しておけば良かったと思った。 ⑫ 指導案をもっと何回も書き直したり先生に指導してもらえば良かった。 ⑬ 設定保育での導入を勉強しておけば良かった。 ⑭ 指導案の環境構成の欄に何をどのように書けば良いか分からなかった。 ⑮ 指導案を何枚も作っておいて、その案に必要な材料、環境等をきちんと理解しておくべきだった。 ⑯ 安全性を重視する遊びの指導案を勉強していけば良かった。 	<p>授業をよく聞き、分からないことがあれば先生に質問したり、教科書等を用いて自分で調べたりすれば良い。</p>

とをすべて出しあった。そして、後輩も同じことを感じるだろうから、一体どのようにすればよいか、解決策を考えて私たちからのアドバイス・コメントとして述べることにした。

ここでは、「実習指導」という科目（それぞれの実習の事前指導および事後指導を行う科目）に含まれるものがあまりにも多かったので、

次の3つに分けて表5として示す。

- (A) 自分で調べたり、事前の勉強をすべきこと（授業を含む）
- (B) 実習園の先生に積極的に質問すべきこと
- (C) 実践あるのみのこと

	内 容	アドバイス・コメント
(B) 実習園の先生に積極的に質問すべきこと	<ul style="list-style-type: none"> ⑰ 遊びに加わらない子どもへの接し方が分からなかった。 ⑱ ブランコに乗れない子どもへの援助の仕方が分からなかった。 ⑲ 子どもの叱り方とメリハリのつけ方をもっと学んでおけば良かった。 ⑳ 片付けの指導の仕方が分からなかった。 ㉑ 楽しく給食を食べてもらうにはどうしたら良いか分からなかった。 ㉒ 指導案をもっと何回も書き直したり先生に指導してもらえば良かった。 ㉓ 先生ともっと積極的に関わり質問など出来たら良かった。 ㉔ 先生方との会話や質問・答え方など。 	<p>分からないことは何でも園の先生に質問すると良い。疑問を持ちながら子どもと接することは、あいまいな対応になってしまうので良くない。</p> <p>また、子ども一人一人顔が違うように性格も違うので、その子どもに合った最善の接し方を先生に質問し、適切な援助ができるようにする。</p> <p>実習生は分からなくて当たり前なので、些細なことでもどんどん質問した方が良い。</p>
(C) 実践あるのみのこと	<ul style="list-style-type: none"> ㉕ もう少し積極的に子どもと関わり、仲良くなるべきだった。 ㉖ 予想通りに子どもたちが動かなかった時に、どう子どもたちと関わっていくか等の対処法をもっと勉強しておけば良かった。 ㉗ 設定保育の時の言葉かけや、子どもの興味の引き方等細かい部分までもっと勉強しておけば良かった。 ㉘ 子どもたちの興味が別のものに移ってしまった時、もう一度興味を向けさせることができるような工夫した言葉かけをすれば良かった。 	<p>指導案を立案する時にどんなに子どもの活動を予想しても、予想通りにいかないことがたくさんある。そのような時は戸惑いやあせりを感じるが、それも一つの勉強で何度も経験するうちにより良い保育ができるようになる。</p> <p>いざ実践する時になったら、子どもと真正面から向き合い、そこから学べるものはすべて吸収するように努力すると良い。</p>

VI おわりに

生活の中で、一つ一つの具体的な関わりを通して子どもの心と体を育んでいく保育の営みは、保育者自身の生活のありようがにじみ出て子どもたちに影響を与える。何気なく行っていること、自分にとって自然体になっているそのことが、子どもの模倣の対象となり、いわば保育の中核となるのだということを、学生に理解させることほど難しいことはない。

近年の学生の実態として、保育現場から「生活体験が乏しい」「基本的生活習慣が身についていない」「体力がない」などがくりかえし指摘されるので、私は、子どもの発達イコール人間としての自立から自律への過程について教えながら、同時に学生の主体的な生活者としての自覚を促すために、様々な工夫をしてきた。

しかし、生活とは形がないし、自分の気持ちしだいでもどのようにでもとらえることができるので、学生自身の生活—過去から現在、そして未来へ—の見直しを通して、保育者としての資質を向上させることの成果は挙げにくい。

私たちの生活意識がいかにあろうとも、生き生きと生きる「生活」の実体はくりかえされ、積み重ねられて、子どもと共に生きる保育がそこに存在する。

このことに思いをいたしながら、実習にあたって学生に必要なものは何か、何を教えておくべきかを追究し続け、学生が真に求めているものを感じとる力を自分の中に深めていきたいと願っている。